ゴースト・レッスン

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゴースト・レッスン

【Ｎコード】
Ｎ４５２６Ｉ

【作者名】
聖騎士

【あらすじ】
恋に不器用な井上智子１６才。
憧れの男の子のハートを射止めるため、恋愛の達人にレッスンを受ける。
ところがそれはホストとキャバ嬢のゴーストだった！
ゴーストのレッスンで、智子は彼のハートを射止めることができる

のか！？

（前書き）

注：この作品はケータイ小説サイトに掲載していたものです。一般的な小説作法とはかけ離れた書き方ですので、ご了承ください。

アタシは出会ってしまった。

運命の人に。

今までの１６年間の人生の中で初めて「好き」と言える人に。

山下（やました）　翔（しょう）くん……ああ、名前を呼ぶだけでも胸がドキドキする。

これが『恋』なのね。

彼は夏休み明けの気怠（けだる）い夏の終わりの午後、この高校に転入してきた。お父さんの仕事の都合らしいけど、彼のお父さんには感謝しなきゃ！だってアタシに翔くんを会わせてもらっちゃったんだもん！

ああ、すてき……自然に彼の姿を目で追ってしまう。

きっとアタシの目は今ハート型だ。

キモい？

それでもいいの！

すこしウェーブのかかった茶色い髪。真っ白い肌に長いまつげ。少し切れ長の目にすっと筋の通った鼻筋。薄くて引き締まった唇。話すたびに上下に動く喉仏。襟元からのぞく、意外にがっしりとした胸の筋肉。身長１８０ｃｍはあるすらっと伸びた長い足に、モデル

のような体型。

一日中見ていても飽きない。

ああ、これが恋なのね。

翔くん……翔くん……翔……

きゃ！呼び捨てにしちゃった！

アタシは一人で赤面する。

アタシが翔くんと釣り合うかどうかなんて、誰かに聞くまでもない。自分のことは自分がよく知っている。

この高校に合格するためにアタシは猛勉強した。今まで恋らしい恋をしたことはなく、特に男子を意識して生活してきたこともない。

だから見た目はとてもじゃないが『恋』なんてできる状態じゃない。雑誌とか見てもなんか別世界の人たちのことで、自分がどうすれば『かわいい』女の子になれるかなんて全然わかんない。

このままだったら翔くんはだれかに取られてしまう。何とかしなきゃ。

翔くんにふさわしい女の子になれば、きっと彼は振り向いてくれるよね。

でも、どうすればいいんだろう？

「まずは見た目よ！男を落とすにはまずキレイにならなくっちゃ！」

アタシの右斜め上で女性の声がする。

この娘は『ミヤビ』。元キャバ嬢の幽霊だ。

なんでも男にだまされて自殺したらしい。

「ばっか！まずは中身だろ？性格わりぃヤツは結局はダメなんだって！」

アタシの左斜め上で男性の声がする。こいつは『ツバサ』。

元ホストで、二股がバレて女に刺されて死んだらしい。

アタシは何の取り柄もないけれど、霊感だけは小さいころから人一倍強い。

どういうわけか半年前から、この二人の幽霊にまとわりつかれている。

いいかげん迷惑なのだが、アタシはいじりやすいらしい。

自分の部屋にいても授業中でもこうやって好き勝手に現れては言いたい放題だ。

「うるさいわよ！授業中なんだから静かにしててよ！」

「そんなこと言ったって智子(ともこ)、全然授業聞いてないじゃん。」

ツバサはアタシの頭の中を勝手に覗くのが趣味だ。

「いいのよ！アタシ古典は得意なんだから！」

アタシが一人でブツブツつぶやいているのに気づいて、隣の席の塚(つか)越益夫(こしますお)がチラ見してくる。

こいつはいじめられっ子だ。

名前が『ますお』なだけに『マスカキやろう』って男子にはバカにされている。

『マスカキ』が何のことかわかんないけど、悪口だっていうことはわかる。

いじめはよくない！

でも益夫にも原因はある。

とにかく暗い！

まだこっちをチラチラ見てる。当たり前だけど、ミヤビとツバサは他の人には見えない。だからアタシが二人と話すと、他の人にとってはひとり言を言っているようにしか見えない。だから気になるのだろう。

ウザい……

アタシがキッと睨むと、益夫はあわてて前を向いてノートを取るフリをする。

はぁ……翔くん……

◇　◇　◇

「『敵を知り己を知れば、百戦錬磨』よ！」

夜、ミヤビがアタシの部屋で演説を始めている。

「それなに？」

アタシはベッドに座っている。隣では、ツバサがおもしろくもなさそうに足を組んでいる。ミヤビはアタシの机の上に浮かんで、拳を振り上げている。そんなことわざだったっけ？

「まずは翔くんの好みのタイプを調べましょう！」

うん。それ大事。ミヤビにしてはいい意見だわ。

「どうやって調べるんだよ。」

ツバサが突っ込む。

ミヤビもツバサもアタシに取り憑いている以上、勝手に離れて翔くんのところには行けない。となると地道な情報収集と観察力が勝負ね。

「ストーカーしよう。」

ミヤビが問題発言をする。

「そ、そんなことしてもし翔くんにバレたら、アタシ嫌われちゃうじゃない！」

「バカねえ……ストーカーするのはわたしたちよ。」

ミヤビはアタシの机の上で足を組んで、顎を手の甲に乗せている。こういう姿がミヤビにはよく似合う。やっぱキャバ嬢だったんだなって思う。

「具体的にアタシはどうすればいいの？」

「翔くんの近くにいてくれればいいのよ。あとはわたしたちが調査するから。」

「わかった。」

かくして人間・ゴースト連合による、『翔くんスパイ作戦』を決行することになった。

◇　◇　◇

その日一日はたいへんだった。

翔くんがトイレに入れば、アタシも隣の女子トイレへ。

翔くんが屋上にお昼を食べに行けば、下の階の先生の準備室に無理矢理ひねり出した授業の質問をしに行く。っといった感じで、一日へとへとになりながら調査を終えた。

その夜、３人（？）で報告検討会が開かれた。

「調査の結果、翔くんの好みがある程度わかったわ。」

ミヤビはどこから出したのかわからないが、メガネをかけている。服装もいつものケバい服じゃなくて、タイトのミニスカートと白地に縦縞のブラウスを着ている。まるでＡＶに出てくる色っぽい女教師だ。

見たことないけど何となく雰囲気で。

「翔くんはＤ組の白石麗美（しらいしれみ）が気になるって言ってたわ。」

ミヤビの報告に、いきなりショックを受けた。

麗美ちゃんはすごい美人だ。

翔くんは綺麗な娘が好みなのかな？

「あと『小雪』のファンだって。」

今度はツバサが報告する。

間違いない！

清楚で落ち着いてて、美人系がツボなのね。

どうしよう……アタシはちびだし地味だし、化粧なんてしたことないし……

「フフッ！わたしにまかせて！」

アタシはミヤビにメイクの仕方や、髪を綺麗系に見えるようなセットの仕方を教えてもらった。

翌日のアタシはばっちり綺麗系だった。

「どう？おかしくない？」

ツバサに聞いてみる。

「ん……ああ……大丈夫だと思うよ……」

何となく歯切れの悪さを感じた。でもミヤビの「素敵よ」の声に後押しされ、アタシは意を決して登校した。

「おはよ〜！」

教室に入るなり時間が止まる。

翔くんがこっちを見てる。

きゃ！どきどきする！いきなりポイントアップ？

すると次の瞬間、教室中が爆笑の渦に包まれた。

「ひゃはははは！智子なんだよ！それ！」

「昔のヤンキーかよ！」

翔くんもお腹を抱えて笑っている。益夫も顔を赤くしてうつむいている。

「い、井上！何だ？その顔は！」

アタシは担任に連行され、職員室も爆笑の渦に巻き込みながら2時間説教された。

◇　◇　◇

「いったいどういうことよ！ミヤビ！」

「あれ～？おかしいなあ……わたしのころはあれでばっちりだったんだけどな……」

ミヤビはアタシの部屋の真ん中で正座している。一応反省はしているようだ。

「アンタ何年前の人よ！」

「３０年前。」

「さ、３０年！？」

アタシはめまいがした。

今のキャバ嬢って言ったってテレビとかでしか見たことないし、綺麗系のメイクとか自分でよく調べなかったのも悪かった。

アタシはそれ以上ミヤビには怒らず、この失点をどう取り返すかに考えを巡らせた。

「いよいよおれの出番のようだな！」

今度はツバサが鼻息を荒くして部屋の真ん中に腕組みをして立つ。

「見た目よりも中身で勝負だ！男はなぁ、『守ってあげたい』って思う娘にキュンと来るんだよ。」

「ほんとぉ～？」

アタシはミヤビでひどい目を見たので、少し疑心暗鬼だ。

「男のおれが言うんだから間違いないって！イケメンホストのおれがな！」

確かに男の子の気持ちを知りたかったら、男の子に聞くのが1番だ。

かくして『守ってあげたい作戦』が発動された。

◇　◇　◇

「先生！ちょっとめまいがするので保健室に行ってもいいですか？」

アタシは次の日の授業中、保健室に抜け出した。

「ねえ、ツバサ！こんなんで本当に翔くんが好きになってくれるの？」

「任せとけって！これで『か弱さ』フラグが立った。フッフッフ……」

ツバサが左斜め上で不敵に笑う。

結局アタシはその時間保健室のベッドで過ごした。

アタシ数学好きだったのにな……

これも翔くんのため！がんばる！

次の授業からは教室に戻ったが、アタシは極力おしとやかに振る舞った。

「い、井上さん、大丈夫？」

益夫がおずおずと声をかけてくる。

うるせえ！じゃますんな！てめえは婿養子にでも行ってろ！

「う、うん……大丈夫……」

アタシは翔くんを牽制しながらか弱さを演出する。

こっち向いてくんないかな？

「よお～し、いいぞ智子！昼休みにとどめだ！」

何が「よし」なのかわからないが、ツバサ的には計画通りのようだ。

◇　◇　◇

４時間目が終わっていよいよお昼。アタシは図書室に急いでいた。

「ツバサ！どうすんのよ！」

「この間の調査でわかったんだけど、ヤツは昼飯を屋上で食べる。」

「うん。」

「食い終わった後教室に戻る。」

「当たり前でしょ！午後にも授業があるんだから！」

「まあ聞け。屋上から教室に戻る途中に何がある？」

「図書室……」

「ビンゴ！」

「それはわかったけど、アタシ何すればいいの？図書室で本読んでたって『守ってあげたい』なんて思ってもらえないわよ？」

翔くんが読書好きで本でも読みにくるなら別だけど。

「違うって！本を読むんじゃなくって、『運ぶ』の！」

なるほど。

午前中保健室に行ったことで翔くんには『アタシ→具合が悪い』というフラグが立っている。そこに本をたくさん持って、ふらふらと図書室から出ていったら「大丈夫？手伝うよ。」とかいう展開にな

る！そこでお近づきになるって寸法ね！

ツバサやるじゃない！

「そんなにうまくいくのかしら？」

右斜め上でミヤビが皮肉る。

「まあ見てろって！絶対上手くいくから！」

ツバサは片目をつむってグッジョブをする。

アタシは司書のおばちゃん先生の白い目を無視しながら、借りられる最大数の１５冊を借りた。

なるべくかさばる厚めの本ばかりを借りたから、まじで重い。足がガクガクしてふらつき、手もぷるぷる震える。

これなら演技は必要ないな。

アタシは図書室の出口脇の陰に隠れ、ツバサの合図を待つ。ツバサは壁に頭だけを突っ込んで廊下を見張っている。

「智子！来たぞ！」

アタシはドキドキしながらタイミングを待つ。

「今だ！」

アタシは本で前が見えないまま廊下にふらふらと出て行った。

突然勢いよく横から衝撃がきて、アタシは本といっしょに廊下に崩れ落ちた。

「ああっ！ご、ごめん！」

この声は！？

まぁすぅおぉ～！

益夫は額に汗をかいて泣きそうな顔は真っ赤だ。廊下に座り込んで呆然としているアタシの前では益夫が必死に本を拾い集めている。

翔くんは一瞬驚いた顔をしてそのあとクスクス笑いながら、廊下に散らばった本を避けて通り過ぎていった。益夫が拾い集めた本を重ねてアタシに差し出す。

「と、智子さん、ほんとごめん。はい、これ……」

「アンタ持って。」

「えっ？」

「もう必要ないから返す。アンタ返しといて！」

本の山を抱えながら呆然と立ちすくむ益夫を置き去りにして、アタシは廊下を走り出した。

◇　◇　◇

「ふええ～ん～……」

午後の授業は何をやったのか覚えていない。家に帰って来てからアタシは泣き通しだった。

「智子……次は上手くいくって……」

ツバサは必死にフォローしてくれるが、今のアタシには何の慰めにもならない。

この二日間の失態によって、翔くんの心は少なくともアタシに傾くことはないだろう。

「もういい！」

布団を被って自分の殻に閉じこもってしまったアタシを、ツバサとミヤビは肩をすくめてため息をつきながら見つめるしかなかった。

翌日、泣きはらした腫れぼったい目で登校したアタシを待ち受けていたのは一通の手紙だった。

宛名を見た瞬間アタシの時間が止まった。

『山下　翔』

次の瞬間アタシは今にも漏れそうなぐらいの勢いでトイレの個室にダッシュし、固く鍵をする。

ディズニーキャラクターがかわいく微笑んでいる便せんを手に、アタシは呆然として立ちつくしている。

何で？どうして？

アタシは震える手で便せんを開け、中の神いや紙を見る。

『話したいことがあるから、放課後体育倉庫に来てくれないかな？待ってるよ。』

ゲタ箱に手紙という２１世紀の若者にそぐわない手法での呼び出しにアタシの頭は混乱する。

「智子よかったじゃん！」

ツバサが妙に高いテンションで真上から手紙を覗き込む。

「これって絶対愛の告白だよ！」

ミヤビはアタシの隣りにいる。身体の半分はアタシにめり込んでいる。

「そ、そうかなぁ……」

アタシが翔くんの筆跡を見間違えるわけない。これは紛れもなく翔くんの字だ。ってことは、これは間違いなく翔くんが書いたということだ。

つまり用件はわからないが、翔くんがアタシに会いたいというのは事実だということだ。

「な、なんの用だろう……アタシに麗美ちゃんを紹介しろとかだったりして……」

「んなことあるわけないだろ！？体育倉庫だぞ！誰にも聞かれたくない話に決まってんじゃん！」

ツバサのテンションの高さに、だんだんアタシも感化されてくる。

「そうそう！いつの時代も告白＝放課後だしね！」

確かに休憩時間のトイレとかはあり得ない。

「や、やっぱそうかな？」

「そうだって！自分のために、失敗しても一生懸命がんばってる智子の気持ちが通じたんだよ！きっと！」

ツバサにそんなに喜んでもらえると、ほんとにそんな気がしてきた。

「そ、そっか……そうかもね！」

「じゃ、智子！告白に備えてその顔なんとかしなくちゃね！」

ミヤビに言われてアタシははっとした。

目は腫れぼったく一重まぶた。ぎりぎりまで寝ていたために、髪は適当にブラッシングしただけ。最悪だ。

「ミ、ミヤビ！どうすればいい？」

アタシは焦った。

「とりあえずハンカチ水で濡らしなよ。冷やせば午後までに何とかなると思う。」

「そ、そだね！」

アタシは大急ぎで個室を出て、洗面台でハンカチを濡らす。濡れたハンカチが熱を持ったまぶたに心地よい。

よし！午前中は授業中だろうが冷やしておこう。

アタシは念入りに髪型を整え、鳴りだしたチャイムに慌てて教室に駆け込んだ。

「お、おはよう。」

益夫がおずおずとチラ見しながら、めずらしくあいさつをしてくる。

今日のアタシは機嫌がいい。

「おはよう！」

益夫は返されたことのないにこやかな挨拶にビビって、目を丸くする。

翔くんの彼女になるんだから、みんなに印象よくしなくっちゃね。そうしなきゃ翔くんまで悪く見られちゃう。

「あの……目、どうしたの？」

「ああ、ちょっと寝不足で。」

あんたのせいよ！あんたの！

思いっきり突っ込んでやりたかったがやめておいた。とにかく今日のアタシは機嫌がいい。午前中はかなりのハイテンションで過ごせた。

ミヤビのアドバイスが功を奏し、午後には目も元通りになった。そしていよいよ放課後となった。

「智子ちゃん、来てくれたんだね。」

翔くんは体育倉庫の跳び箱に寄りかかるようにしてアタシを迎えてくれた。こんな薄暗い、陰気な場所でも彼は光り輝いている。

「は、はい……」

うわぁ～……まともに顔見られないよ……

アタシの顔は今真っ赤っかだ。

「俺ね、智子ちゃんと付き合いたいと思って。」

「えっ？」

アタシの人生最大の幸せは唐突にやってきた。

いやいやいやいや！

調子に乗るな！智子！

聞き間違いだったら大恥かくだけだぞ。

憧れの翔くんを前にして浮かれてるから、そういう幻聴が聞こえただけかもしれないじゃない。

「あ、あの……ど、どどどういういいみ？」

アタシは恥ずかしいくらいにどもってしまう。

翔くんは熱を帯びたアタシの顔をまっすぐ見つめてくすっと笑う。

この笑うと子供っぽい笑顔が今はアタシだけのもの。アタシは状況も忘れて見入ってしまう。

「そのまんまの意味だけど？……俺じゃダメかな？」

そそそそそんなことあるわけなななない！

「そ、そんな……」

アタシは頭の中も言葉も動揺してパニックになる。

気がつけばアタシは翔くんの腕の中にいた。何の種類かわからないけど、いい匂いがした。翔くんのいつも使っている香水の匂いだ。

「じゃ、俺と付き合ってくれるんだね？」

アタシは翔くんの腕の中で目をつぶり、小さくうなずく。

これは夢？

妄想？

何でもいい！

このまま覚めないでいて欲しい！

するといきなりマットに押し倒された。

「えっ？」

目を開けると翔くんの綺麗な顔が目の前にあって、アタシはキスされた。

「んんん～！」

パニックだった頭がさらに混乱してアタシは思考が停止する。
翔くんはそのまま舌をアタシの口の中に入れてくる。いわゆるディープキス？
「んんっ！んんん～！」
翔くんの舌がアタシの口の中で別の生き物のようにうごめく。
い、いきなりこんなのってあり？
アタシはやっとのことで思考を取り戻し、翔くんの胸を両手で押しのけた。
「な、何するの！？」
翔くんは不思議そうに首をひねる。
「だって俺のこと好きなんでしょ？」
そう言うと翔くんはまたアタシに覆い被さってくる。
こういうのって段階があるでしょ？
デートして手をつないで、夜景を見ながらキスをして……
あ、もう初キスはしちゃったか……
アタシが混乱したまま呆然としていると、スカートの中に翔くんの手が入ってくる。

「ちょ！ちょっとやめて！こ、こんなの！」

「付き合ってるんだからいいじゃん。ヤらせろよ。」

アタシはここで初めて悟った。

翔くんはアタシと恋がしたいんじゃない。えっちがしたいだけなんだ。

翔くんはアタシの心には用はなくて、身体に用があるんだ。

「やだ！やめて！」

アタシは翔くんに押さえつけられたまま暴れ出す。

とにかくこの状況から脱出して、もう一回冷静に話し合わなきゃ。

突然左頬に鋭い痛みが走った。

「きゃ！」

一瞬何が起こったのかわからず、意識が遠くなる。

平手打ちをされたって気づいたのはブラウスのボタンが全部外されてからだ。

「お前は大人しくしてればいいんだよ。気持ちよくしてやるから。」

アタシの中の翔くんは死んでしまった。

今目の前にいるのは翔くんの顔をした悪魔。今アタシに起こっているのは地獄。

アタシは涙が溢れてくる。

「どうして……こんなことするの？アタシ……嫌だ……」

「お前さぁ、俺のことといっつも目で追ってたろ？しょっちゅう目が合ったもんな。だから俺に気があるんだなって。」

翔くんはアタシのブラを器用に外す。

ああ……翔くんはこういうの慣れてるんだね……

「いいだろ？好きなヤツとヤれるんだぜ？」

翔くんがアタシの胸に顔を埋める。翔くんの舌がアタシの肌に触れた瞬間、アタシの中で何かが弾けた。

「嫌だあ！」

アタシはさっきとは違って、かなり乱暴に翔くんを突き飛ばす。

もうアタシの中で翔くんに対する恋愛感情はなかった。

「アタシ、アンタのこと勝手に想像してた。でもこれが本性なんだね。」

アタシはブラウスをぐいっと引っ張って前を隠す。

「アンタなんか大っ嫌い！」

「うっせえ！」

翔くんはそう言ってアタシの両手を押さえつける。

乱暴にブラウスがはねのけられ、翔くんへの想いがいっぱい詰まっていた胸があらわになる。

「いやあああ！」

アタシは力を振り絞って手を振り払おうとするが、翔くんはものすごい力で両手をアタシの頭の上に押さえる。

ああ、アタシヤられちゃうんだ……

そう思うと手の力が抜ける。

「このやろう！」

「死ね！」

翔くんの頭の向こうではツバサとミヤビが殴りかかったり、蹴ったりしている。でもそれは翔くんの身体に触れることはなく全てすり抜けてしまう。

「もう……いいよ……」

アタシは涙を流しながら二人に話しかける。

「中身を見ないで恋をした罰なのかな……」

「何一人でブツブツ言ってんだ？おかしな化粧したり本ぶちまけたりわけのわかんねえ女だと思ってたけど、やっぱり変な女だな。俺に抱かれるだけありがたいって思えよ。」

翔くんが乱暴にアタシの胸を揉む。アタシは気持ちよくも何ともなくって、鳥肌が立つだけだ。

「ツバサ……ミヤビ……ごめん……アタシのために一生懸命協力してくれたのにこんなことになっちゃって……」

アタシは次々とあふれ出てくる涙を、拭うこともできずにいる。

「へっ！やっぱり変な女！」

翔くんの手がスカートをめくりあげ、アタシのパンツに手がかかった。

その時体育倉庫のドアが荒々しく開けられる。

「と、智子さん！」

「ま、益夫！？」

益夫だった。

顔中痣だらけになって、鼻血を出している。

「てめえ、入るなって言っただろ？」

開け放たれたドアから、翔くんと仲のいい男子が二人飛び込んでくる。

そっか……見張りがいたのね。

元々そういうつもりだったんだね……

「わあああああ！」

益夫は翔くんに向かって突進してくる。

翔くんと益夫は絡み合って、倉庫の奥に転がっていく。

「んだよ！てめえ！」

翔くんは益夫に殴りかかり、見張りの二人も益夫を殴ったり蹴ったりし始める。

「きゃあああああ！」

アタシは声の限りに叫ぶ。

「ちっ！やべえ、行くぞ！」

翔くんたちはボロ切れのようになった益夫をそのままに、体育倉庫から出ていってしまった。

「う……うう……」

静けさを取り戻した体育倉庫に益夫のうめき声だけが聞こえる。

アタシは反射的に動き出す。

「益夫！大丈夫！？」

「あ……れ？山下たちは……？」

「もう……行っちゃったわ……ねえ、どうして？」

益夫は腫れ上がって開かない目をほこりっぽい床に向ける。

「ボク……」

益夫は顔を上げると、アタシの頭越しに後ろを見る。

何を見てるの？

アタシの後ろにはミヤビとツバサがにやにやしながら立っている。

……もしかして！？

「ボク……実は智子ちゃんと同じでゴーストが見えるんだ……」

えええ～っ！？

アタシを言葉を失った。

「最初に智子ちゃんを見た時は驚いたよ。男の人と女の人のゴーストが両側に浮いてて……でもよく見るといつも楽しそうにしているから取り憑かれてるんじゃないなって安心して気づかないフリしてた……」

だから益夫はいつもアタシのことチラ見してたのね！

「この先は俺たちから言うよ。」

ツバサがアタシの横にすうっと移動する。

「智子がアイツのことが好きなのを知って俺たちは何とかしようって思った。もうわかったと思うけど、アイツは最低なヤツなんだ。」

ミヤビがツバサとは反対側に移動してくる。

「でも智子目がハートマークで何言っても聞かないような感じだったから、わたしたちで話し合って智子には恋愛の勉強をしてもらおうと思ったのよ。」

「何事も経験が大事ってね！」

ツバサはウィンクをする。

「これでわかったでしょ？男は見た目より中身。顔で男を選んじゃ

だめよ。」

やられた……

アタシはミヤビとツバサの手のひらの上で踊らされてたんだわ……

「でも、益夫はどうして？」

アタシはだいぶ落ち着いてくる。

「ああ、こいつは……」

ツバサが言いかけると、益夫は慌てて遮る。

「ちょ、ちょっと待って！この先はボクが自分で言うよ！」

益夫は赤面しながら改まってアタシの前に正座する。

顔中腫れ上がって痛々しい。

この傷はアタシがバカだったからつけられた傷なのね……

「ボク……智子ちゃんが好きです。でも智子ちゃんがアイツのこと好きなの知って、どうしようって思ってたらツバサさんとミヤビさんがこの計画を話してくれたんだ。智子ちゃんがアイツに襲われるのをボクが助けるって計画……」

アタシはミヤビとツバサを睨む。

二人（二体？）は苦笑いをする。

「こいつの名誉のために言っておくけど、こいつは襲われる前に智子を説得するって言ってたんだぜ。でも、智子はそれじゃ絶対聞かないって俺たちが止めたんだ。」

ツバサが悪びれずに言う。

「二人にボク言われたんだ。今はアイツの見た目にとらわれて視野が狭くなってるけど、智子ちゃんは素直でいい子だって。智子ちゃんの彼氏になりたかったらそのくらいの根性見せてみろって……」

益夫は恥ずかしそうにうつむく。

結局益夫も二人のレッスンを受けていたのね……

「実際3人とケンカして無事ですむかどうかはわかんなかったけど、愛の力はイダイよねえ～。」

ミヤビは胸の前で手を組んで、目をきらきらさせる。

益夫は手を前について土下座の格好をする。

「智子ちゃん、黙っててごめん！でもこれからはボクがきみを守るから……だから……」

「ストップ！」

アタシは益夫の肩に手をやって、顔を上げさせる。

「アンタの気持ちはわかったわ。ミヤビとツバサのやり方は気に入

らないけど、それもこれもアタシがバカだったから。」

アタシは益夫の目をちゃんと見る。

「でも、もうわかったわ。男は顔じゃない。中身よね……アタシのためにありがとう。」

アタシは益夫にキスをする。

アタシのセカンドキスは血の味がした。

「へへっ！俺たちの“恋のレッスン”終了！ってな！」

ツバサとミヤビは気を遣って壁の向こうに消えていった。

◇　◇　◇

結局アタシと益夫は付き合うことになった。

周りからは変人カップルとか言われるけど気にしない。

他人の評価は関係ない。大事なのは自分の気持ち。

ツバサとミヤビに教えてもらったこと……

二人ともありがとう。

今はもう二人はアタシの斜め上にはいない。

どこに行ったかって？

それは……

「おはよう！」

アタシは教室に入ると益夫の隣りにカバンを置く。

「おはよう。」

付き合いだしてから益夫は急にかっこよくなった。前みたいにおどおどしていない。

男って彼女ができると自信がつくみたい。

アタシは益夫をもっといい男にしてあげたい。

アイツ以上に……

アタシは教室の真ん中辺りに目を向ける。

翔くんの席へ。

翔くんの両側には見慣れたゴーストが二人、宙に浮いている。

一人はイケメンホストのゴースト。

もう一人は派手なキャバ嬢のゴースト。

彼らは翔くんに一生懸命話しかけている。

彼らのレッスンを受ければ、きっと彼も変われるはず。

それを期待して、アタシは彼のしたことを忘れることにした。

きっと彼らのレッスンは厳しいから。

アタシは益夫を振り向いてほほ笑む。

「ふふっ！レッスン開始ね。」

益夫はアザだらけのひどい顔で笑う。

その笑顔は輝いててまぶしかった。

『ゴースト・レッスン』《了》

（後書き）

以前別サイトに掲載していた恋愛短編集の中の一つです。保存してあったのを偶然発見したので公開します。

すごく懐かしいです（^＿^；）

よければ評価や感想などお聞かせください＞（＿＿）＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4526i/

ゴースト・レッスン

2010年10月14日11時57分発行